へ13
2378
202

遠3
2378
202

東里庵山人作
勝川春扇圖画

画組八京傳
趣向楚満人 其儕頼丹前

巳卯春

丹泉堂梓

宝玉文庫

鶏の真似をして函谷の関の戸を開くゝめ犬の真似をして狐白裘を盗みし孟嘗君が客中ふあり。京傳翁が画面の真似をして覓人の眼を冥らまんとは楚満人翁が趣向の真似をして。評判を盗んと斗り。愚勝の者ゝ兄といえども砂糖屋の銅壺。耳きを焼ひ蒲焼屋の猫苟きを好まざるがごとく。複雙の得史も今い視者の鼻ぶつき目ゐ倦き厚ふ為て孤立仕立ゐろしの新らしきも繻子ゝの織アそのうるそ法ひ猪の罪多くして切立の標剣をうゆること堅ければ唯虎の威を借アて。書肆の米櫨を。潤さんと欲するのみ。

文政元年六月稿兒
同二年正月新販

東里山人誌

喜刀太女房
かきり

氷
別是を弩ち
俄解
富川

金のあ新木

早起を種として家業の
場ふことを為正直実業の
目出〳〵ふ毎病长寿の
業を生じ福徳
しきの自立の
花
知ふ
きて
子孫繁栄の実を結ぶと
うさぶ〳〵
くかんと思ふ心のおろかふと
金のある木ハ我身ゆゑある

東里山人画賛

生子嗟七
環啣草結不忘
香ふ
白人
冊前むくの梅白〳〵
士菴

○播及天児の
藩中
○古萬里
喜刀太
○秋の
ます
辺ヤ
みそ
さふ
東里

元亨
天児
藩中
下を来

内の
后の
山賊
仇あり
と

念彼觀音力
釋然得解脫呪詛
諸毒藥所欲害身者念
彼觀音力還著於本人或
遇惡羅刹毒龍諸鬼等
念彼觀音力時悉不敢害
若惡獸圍繞利爪可怖
念彼觀音力疾走無邊方
蚖蛇及蝮蝎氣毒煙火
燃念彼觀音力尋聲

○播及室の津の
花街
冊前屋の拍
遊女
○然間戸

明六の弦房ゆし
霜の布　貝綿

規節ふ成名
小者ふ栄
悪小耻者ふ能
功を大

○古萬里雛之助が僕
○景平

梅干や　足袋て居ろう
梅の花　真角

越後の中州に立る山の明神
地獄の祭の図

雲鬢輕蟬翠桃
蛾眉淡春山掃
曉の色とい濃ら
甚角
東里
室の津丹前屋の抱
二羽重

みえ
義ふ
茶
かん
物語
作兵
作三

か
き

高

馬琴製

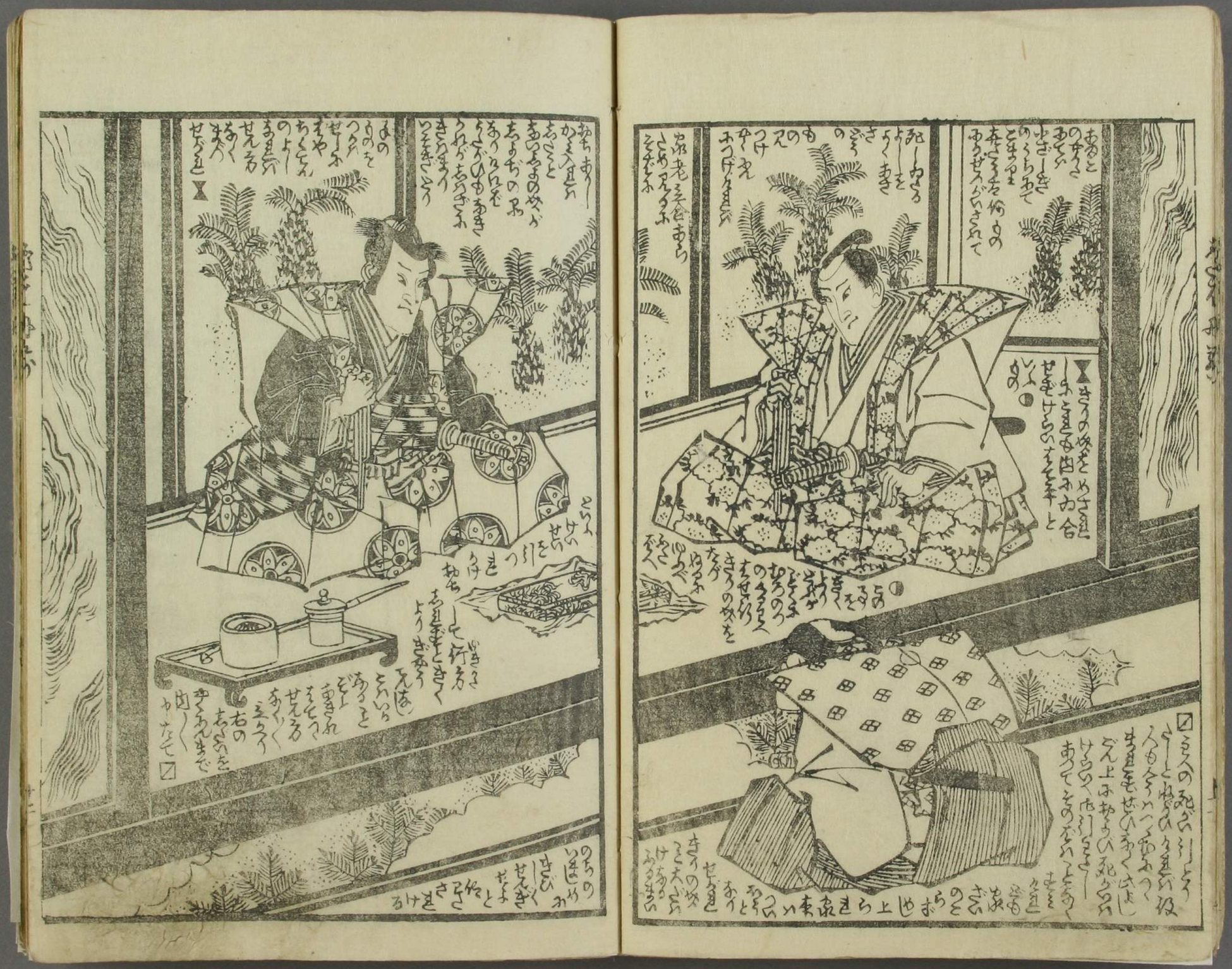
○神女湯　一貼　百文

○沢虫のくすり　三十二文　泉市

○きのふのことゝ八月の
ちゝをもうしてあ
ぶなきの男一人まくと
あくもとよりこれらもちゝくま
まぶなどをうつくく
こゝふ
まきくまをが
きりあ
せぶなのるの
あまどいなんど
ゆるのちあふ
いろるまでえびを
つくゝえどの
ゆうぐるふいろまで
まるるをびよき
性をもとめて
ゆくゆく
一あ中のうらまれ
めとありくる
ちるふ同じ水はけふ
ちるとあいちよのめと
ゝふのありきのめと
あいロあてどゝの二ツ三ツ
まさりしにちりのあるが
あゝんもあくのとうあまて
んなそうふぬるの
なれが

○あぶなくて
たぶんを
のゝぞ
いるあるる

あ時きりのめをまてゝ
ひとゝふあるのゝくゝ
おりむきくんぜんやのゝとく
いろゝてあいちゝのめい
ちゝまゝとといふまを
ふきりのめいふまを
といふまををうつて
てあるやふあるゝ
あもかくるゝとか
友人ともいか
うらぶろ風ぞく
あと人ども
よるをびあゝ
きどもふとゝく
もゝとゝう
あも思ふま
一三枚のちきりを
百枚れのちひを
くゝをとまれてあんどゝふ
友人もうくをゆしとを
きりのめいまゝゝちゝくんまく
あびゝくゝとらまくゝうゝとく
くゝひゝるあのあるのめいひとう
分のゝかまきなをとかるあも
あくゝるゝゝちゝ日ふまゝてゝうのゝる
まきゝゝあゝきりのめがくゝい
ゝくゝひまゝようゝあゝとゝゝどもゝきゝ
あゝるまのゝあゝまゝゝうゝくゝいゝんゝ



東里山人作
勝川春扇画

嫩丹前

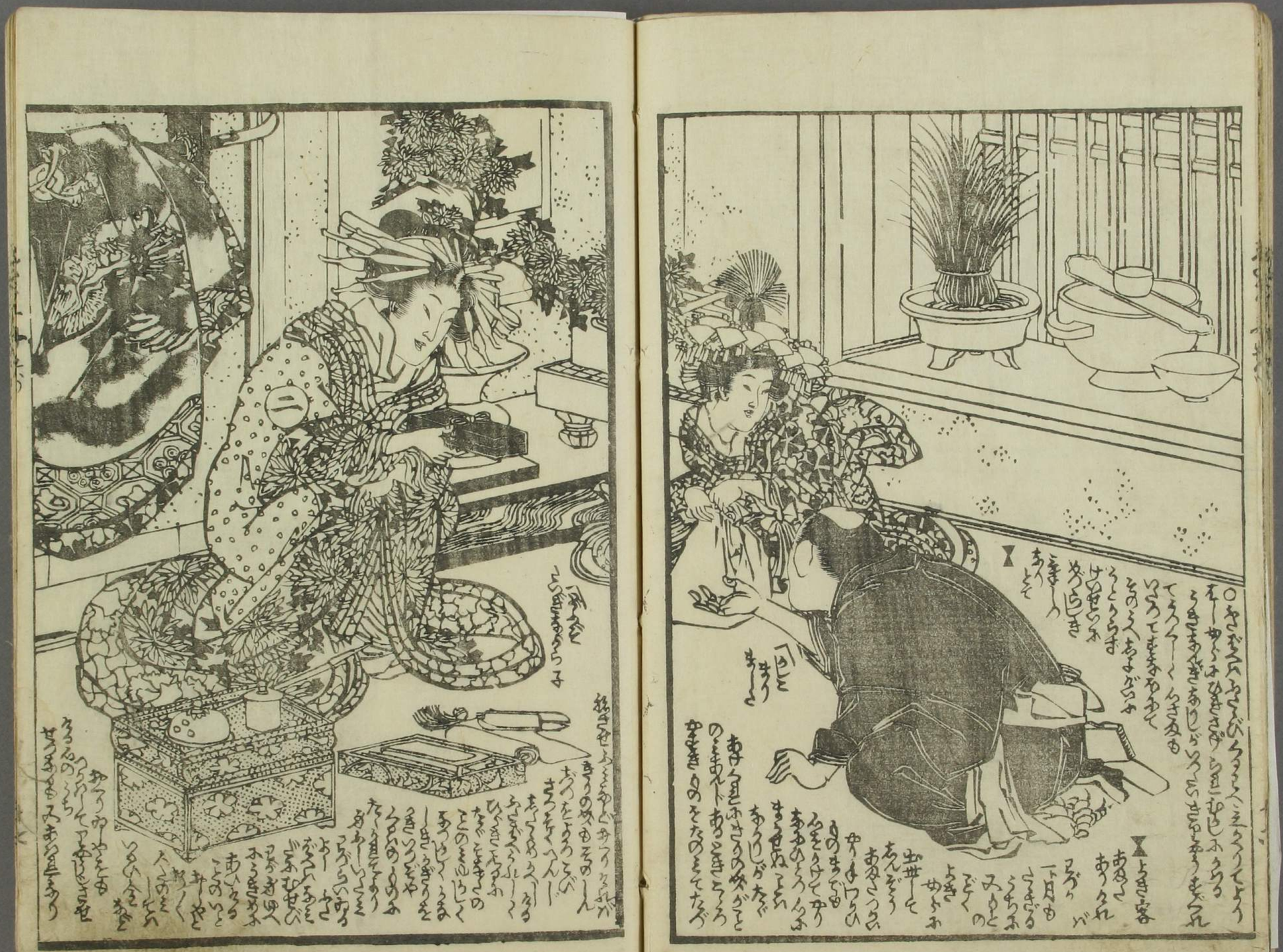
板元 泉市

東里庵山人作
勝川春扇圖画 後編巻

みさを丹前

巳年春

平泉堂梓



○きうの
ぬかふくろ
があるみあそ

十八

さてもきろのぬいは大江山へ
さーかをくだるふもと
あののみのく山中ふ
あて日いちの
さくふくふ
わくら
よの
あさの
月あけ
ゆくすぎ
さきのあ
もえくひ
ぬいをあさ
の木の根ふ
こーちちみ
あぞらく月の
上ることまちぬさる
ふやさいら春よー
かやのみひちぶりしてち
よりヒ人の
山ぞくあら
ひとりのでうき
やりをもつて
きろの吹ふ
うつる
きろのいも
スい山ぞくぎん
あ丑とくさふ
ぬききろうちら
ろえとまてちけぞも
あるあふあいよい
大ぜいあて

ひるあくつきたを
うき中ふ
さ丑
あくろもくものまま
かまーとえをうのどくつふ
山ぞくのさあふけぶら丑
ゆるひをたんが丑大ふをとぎ
まら丑三をふ金ーもあろうう
くふ
せめたい金ーをたをたらんと
山ぞくおうとひろいいろふ
くくーきろどう
ぶうぞうさふいの
つひときく
さぐも
ぶのえて
あるく
ひのあ丑
れちうのく
をあがもの
あるうふん
あてあのさ
ぶさたうぬる
あのうふく
ぞうのうふをけ
ひうとぞうれ
ーくの山ぞくき
ぞけ　やのうきをうがうとへ
ふぶんあくりあうとそのまくそば
あるふ木のれのオふてしつけぞきうろ
たうふをうえをいぶくうくえきうろる

大江山の賊長
伝房丸
伝
き

つぎき

かくてきりのゆらん作いた大江山の山中あて山ぞくいたくどもあるさの人をこころ安しらべそのまゝ
ゆきまぶとそとまうあるあまつどのくいさらのこゝ
ろうくくくまぶまうあるのくちおろろ山ぞくとゝ
てゆくの人をあまもてのあんどくらのしてちも
ちぢゆくあるいとぎせんぎをとぐぐしとそちも
山のふもとある村くへきびしくはもひ仏とさされ
ゐる村おきいさいりしまうとうそくのさるいきく
ゆくびねどはもどい村くふふしぎのるのいそ
まりて一日あんぎ仕りひそのよういたくとゝ物きし
合和あんふもくぐもを夜中ことぐくうづまぶとゝ
いぶまきろ仏たぬきのいぎあるぐしときのて仏く
たとくちくせうのあぎふもせよ今月人のいのちを
つあぐ合和をうぐいとうとゝそのまふもをゆち
まぶとまぶまう村くへぶあんをくをあて人多
あくさぶいぐしそれくれまう肉ぶしをうとくく
ぶしといいとさしてぞうりる
○とふゝまを年いこ中いぶふるをゆしてあ
ぎゆうじゆのうりあまぶまうあへうさへあい仏ぶ
してひとうあとくのとう大江山のふもとある村の中
ふかぶをうとめてあしをいさめてあんきのてのふ
もとは六日とうはとうしとくくのうゆきをき
くふ夜中合和のあんしうせるとをいうあふ
ぎのひとうあうとみのいまをもうまをうぶいる

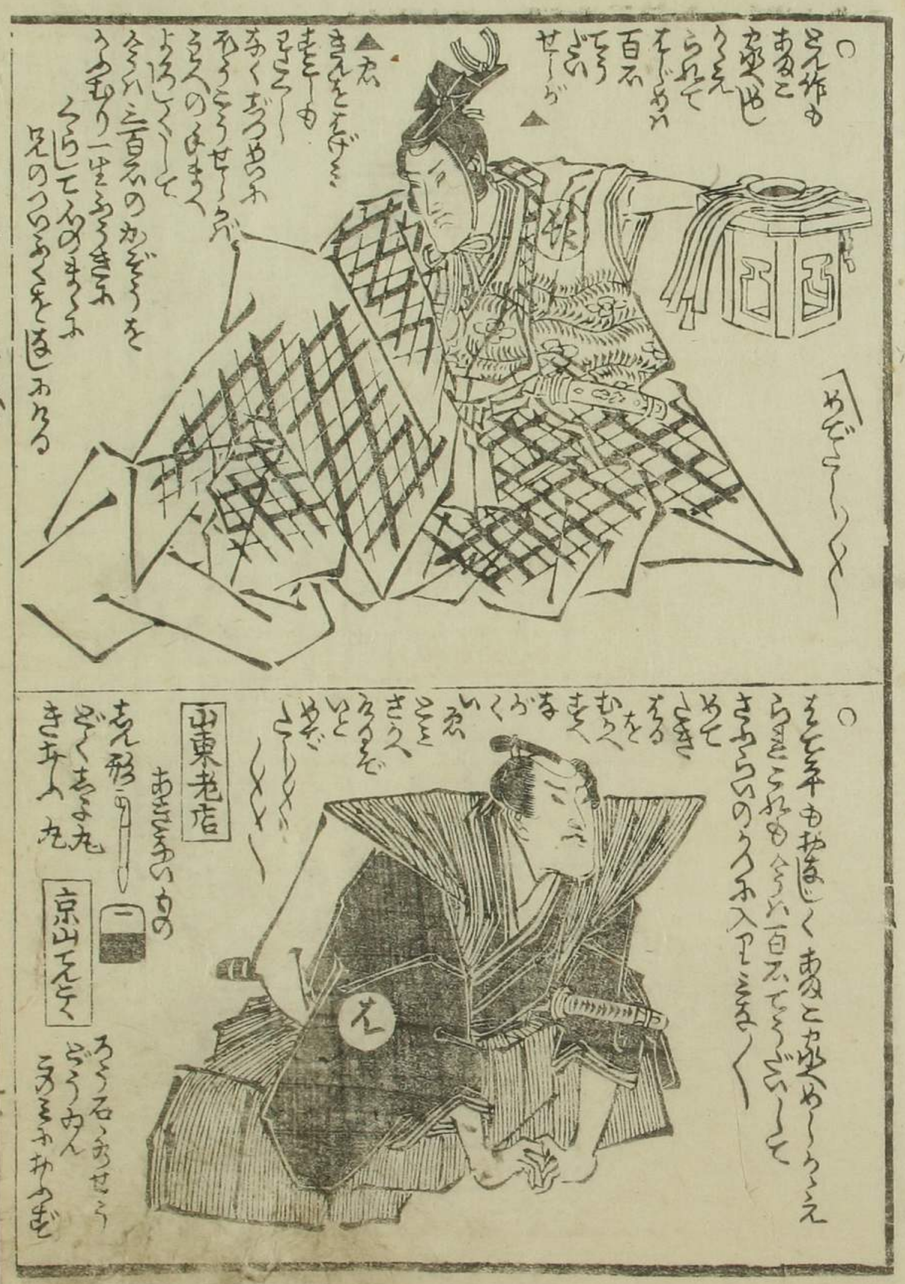
ちゆ山のふもとある
村くへまうあ
ようまゝぞく
せんぎきぶしく
きをたゝ
あめきあ
あるたゝくども
ひとうたゝ仏
とゆきしきと
ふしあれい
まをこゝ年わ
せんうきあく
村のうちを
まいでみ大江山
の山ゆふいさう
てもこと
あゆきりの
あうげ谷の
きくあど
ふをうけてあるきよ
の水かあり泉を
ふうひゝうふこうふ
山と山との谷あひわ
大きあるひの口あり
くちのうきをのぎきえうふ
いとくらゝてあゆきこのふ
さをいふあうどうゆさふきし合和を
くぎひとうくせりの〜まゝちふ
うさうひあ〜いうぎふひとくを
うゝ村のりのぎもいあるもい

きゝい仏あど村くへあて
合和をうぶうまし〜を
ゆく〜まゝゆふうさうひい
あるまい

馬琴製

ハテ
あやしき
ものの
ようすよ

ハテ
ものの
ようすよ



文政二巳卯年正月新版合巻目録

雲調貢身代鉢木　全六冊　曲亭馬琴作　勝川春扇画

画組八京傳　絵面八楚満人　其侠蝶冊前　全六冊　東里山人作　勝川春扇画

阿妻八郎兵衛　全六冊　東西葦南北作　勝川春扇画

小むらさき権八　全六冊　月光亭笑寿作　勝川春扇画

篠汁の仕業　全三冊　東里山人作　勝川春扇画

本草音目集　全三冊　東西葦南北作　勝川春扇画

子の年の姿　園蛍薄雪草紙　全六冊　東里山人作　勝川春扇画

小雛半兵衛　釜田又八　蝙蝠羽織昔通人　全六冊　東西葦南北作　勝川春扇画

安全
関白十帥